

復旦書目錄

三十

大正四年一月上澣起筆

特別
14
1919
279



ひして政權の爭奪に在り。斯の如くにして國防の大事を弄び、加ふるに、財務の整理、學問の獨立、及び各般の施設を擧げて、悉く之を蹂躪し盡せり。政爭の手段斯の如きは、之を平時に見るも容すべからず、然るに之を此非常の際に忍ぶ、噫亦甚だし矣。

惟ふに、公德の荒頽右の如く、一時一個の小利害に専らにして、國家全局の消長を顧みず。成敗を權變の末に争ひて、大義名分を忘るゝは、實に國民的神経中樞の一大病患にして、大隈伯之が救療を急要の時務とし、之を政綱に宣明せられたる所以のもの、亦實に偶然に非る也。今や大隈伯は、國民の聰明なる判斷に信賴し、之が救療の實績を擧げんと期す。諸氏夫れ伯を援けて病患を根絶せんとする乎。將た傍觀して、之を助長せんとする乎。諸氏若し向背を誤まらば、其本亂れて未治まらず、興國の基礎頽れて、國

光の宣揚決して全きを得ず。而して伯や固より全能を完具せずとするも、方今の政界、伯を外にして能く此至大至重の局面を擔當するの偉材を見ず。近八旬の老軀を提げて、壯士尙及ばざるの精勤を抽んで、善戰健闘、着々事功を擧ぐるの巨人をして、徒爾に終らしむるは、斷じて國民諸氏の志に非るを信ず。諸氏夫れ公心を奮揚して、來三月の總選舉に臨み、立憲國民の理想を實現して、遙に先帝大憲欽定の至恩に奉答し、近く今上天行乾々の聖徳に奉賛し、大正維新の根基を固うするに努めよ。

大正四年一月

大隈伯後援會

○旅終の美人丹を至者四とゆめの銀縁を
花竹のこころ此は神託痛を患ひ一を
二洲をす訪つて其の花器をえり佛が
生をせしむるの心縁をえりうつくしおとし
ろまきこのちりも尤も遠きちあるは朝の心
と見えしきし童子の木縁をうす丈四尺許
面谷活動丸心はあまの達磨のふると
ゆ代をすもむさうさうと作らざし之
んふ解しる根本のききもゆるりゆりゆり
りこころ油和し無延林みしるさうし先
年牛乳の氏おねの骨董高出地し
そるあのおもひしうしきき市やと逸

かまひて年し例のお品をうす垣尾の横
幅を備うさうけ車をあしおるお遊を
七燦ると繪了園を月下先走り
おもしるき出来るんも後款善通
のち口と跡うう三えきう外に十六尺は
をせうし心りゆりゆりあつた泰古の銘
近年の作と見えきこのあるんは十一基
揃のをを飛るるうすしえんも買うし
とうすもし三の執向いまじつときうお
んが唯比借りしてその名の床に並ぶ獨を
の友とすも

○おるはうす真面うすの扱し強目を

大正 年 月 日

東京市豊町區八重洲町一丁目一番地

大隈伯後援會

謹啓 嚴寒の初愈々御健勝 大隈此奉
 御望候陳者先回御協議相願候本會宣
 言書の義別紙の通り訂正仕候間一應
 御目懸け申候就こは至急御一讀下され
 御気付の点も存之候は御遠慮なく
 御添削の上折返し御返送願ひ候
 比段取急さ得申す候 敬 具

大正四年一月二日

大隈伯後援會

市島謙吉 敬

とめを物生と作一方くまうひしりお法出
づこんと今如そのしりあうしりおおふ
れと此の希望とさるけとも道り道をそ我
の大なるゆきまうしりおとさるけと
傾けさるけがらりのさ法とさるけと
んはとさるけがらりのさ法とさるけと
はら其の希望とさるけとさるけと
は道り道をそ我のさるけとさるけと
めありの作のさるけとさるけと
の譯本あふさるけとさるけと
讀書をともひ得る上と三四篇と来年
乃ち河あころる年とさるけと

左アふかまうしりお譯本あふさるけと
義を要せしべし才一自分の苦痛と
年々守りて曰し譯義と保りえりこと
は一向のさるけとさるけと
もまうしりおのさるけとさるけと
ても見たりしありの作を試みても見たり
一万又何のさるけとさるけと
自分の性質とさるけとさるけと
多しりおのさるけとさるけと
さるけとさるけとさるけと
とも一年のさるけとさるけと
佐とさるけとさるけと

リシテこそぞ實に救おの事(る)るもはくは
余も空平もあはれ道のゆきありするに
ふしと略す回意をせしむ、女は文
直家をもつれ、實に救し、うすまふ言を
文の身のみり、惜しむるも、(道)道
のゆき海義の救うにけり、一は物
おもさるもあはれ、助待する所の
いとん、いと大なる、このゆき、海を
朽の位をせしむる、とん、十年
位の、問ふゆき、染の志を、
ハ染の、あはれ、思ふ、
此上染の、名を、と、

うし能はる也、此も、人、と、
同、し、考、定、す、都、也、(一)月、
○道、是、方、も、教、の、
教、の、問、の、心、の、
の、高、の、木、
この、を、得、
この、中、
け、
の、
り、
り、

と有る者もあらずと承知致し何分見
かろくも多幸の道中長らぬといと
けしく且つ摺り換し靴七靴中いさ
念御前申候七し甲子ささせとい候
事はお成すまいと北米志をあらたに
こり付候るんとい多幸紙代筆
料もよほし入候まとい何れ御子鹿の
本は行はしと出来候や出候るも
あらずしと承知せとて其上
又新しきものありしと承知せとて
と御前は何分見とてこの水今以
禁を早く早

右卯二月廿一日の由三月七日の爲書状
黒木欣中石村の馬琴の日記を外交
書とて之を一見し其尾に馬琴の自
著の跋あり御前とて馬琴も山功
に對し御前之意を満ししり其文
御前やとて言し其なるは御前
へは御前之作を御前馬琴の向て
そのそやす裏通りとて馬琴の御前
偏癖を御前を御前とて馬琴の御前
高き又とて御前とて御前とて
を御前とて御前とて御前とて
ことき人物の御前とて御前とて

了、東山のこときさのさ方なるあらしむわ
いさうのく見減ちるのあらしむし扱る
馬習のぬ一敵もさうしとおわさし行
彦七人格もさく人物も北正或馬習
此よりし七末に知つて馬習の云
ひすさうめささ却つて自己の人格を破
毀するもつて其の為人の徒落ち
りし一端推してさき欺つて月八日
○一月九日 日に伊豆ささ山城をむ
捷路さき四方印長岡の岳にささるる方回
長とささるるさきつれんとささるる判監
御

御を執河をささるる監監了と乗つて
をささるるもあらしむ一行の取さるる
昔しの旅を味もささるる一息とささるる
ちと監監つて乗つて日ささるるつれんと
るおしとささるることささるるに
是の在をもささるるささるる
路を往、三峠行とささるる石標の
あらしむささるるささるる
ささるるささるるささるる
こいささるる木もささるる
つとをささるるしおささるる
便のためささるるささるる

らんきいぬきをそんくしと道とをぬききり
唐と出さくしとく宗原をまろく興しとて
七下んい道を鑑まんんし殊るふりあいの
西宮の道ゆきしきこと云らん方す興
丁と興き親めとも興中の人と其の共
を欲しす人日暢氣のいふるをさし
と起るは流流を交ふ、らんを昔し雨め
く田カ工を興しをて画山録を度りる
を想起しとるの流の雨師と一粒のぬれ
とさそのる身し烈真をそ念とをす
見羽おつと毒保ととそあの然ひ元
るのこくしりの吟詠を元ふのさく

せんぬ流とさく併し
成とぬとさく習得とさく
一か酒むを得り
昔末後昔の元めと酒の元ふと波
のあうしとさく
興中の人い興ととも又酒の昔と今
ハアソナとさく
さあちとさくハおととさく
さうとさく
さうとさく
さうとさく
の換ハ折らさうとさく

つとけきやうと。のうが、そんを新居を
りしとらうと。刺つてを提きを懸て庭に
無難の道をあう。故難を一層難う
漸く上つたえとあると。三崎を片く
たう。下りる。こ。新井洋を約一里
の眼果地を併けて。意地拾めて。廣
う。心雨。其戴の。中山嶺を。折
又。大の。つら。湖。又。凡。景。書。入。し
又。連。道。と。終。る。余。回。く。中山嶺。と。文。魁。の。也
ま。右。と。連。ら。る。ま。り。一。帯。の。立。降。松。樹。の。列
と。う。う。と。函。山。嶺。の。な。り。う。う。と。廣。田。屯。の
日。ま。り。う。う。中山嶺。の。右。方。に。屹。然。と。立。る。群

山之洋書家。家。の。や。う。と。あ。道。道。七。和。し
こ。あ。ち。し。う。き。人。心。に。う。う。と。こ。そ。の。余。回。く。東
北。の。山。嶺。地。に。人。心。に。う。う。と。四。五。十。年。前。の
乗。り。あ。る。洋。書。を。戴。く。人。物。を。乗。七。和
心。の。書。も。も。し。死。な。る。ま。り。う。う。と。新。井。洋。書
儀。の。心。に。う。う。と。元。山。其。内。新。井。洋。書。を。乗。七。和
ま。り。う。う。と。こ。の。に。あ。り。ま。り。と。名。を。同。あ。し。地。に
七。和。書。家。の。新。井。洋。書。儀。の。略。と。似。ま。り。う。う。と。ま。り。う。う。と。意
解。と。日。あ。り。ま。り。う。う。と。ま。り。う。う。と。一。条。道
へ。入。り。ま。り。う。う。と。汚。穢。甚。し。く。あ。り。ま。り。う。う。と。興。行。に。ま
け。は。北。地。の。米。と。俵。あ。り。ま。り。う。う。と。ま。り。う。う。と。ま。り。う。う。と
ま。り。う。う。と。酒。と。と。ま。り。う。う。と。地。南。上。地。と。ま。り。う。う。と

すまじき自入のて回古銀の位をよとて書かまし
較々梅屋のしものをりしを元銀とてしと書
揚とあるす ①と減しなり

〇一此ひは元以しと思つた久保教桑の晩世方
 園一田中伯奇の精の~~心~~のむと
 あと心うは山の上の別墅一久保う元年
 去折一はありえり枝人多と笑つたと思つて
 そをもとろふが方向をゆめたあり~~心~~す
 七一説の様人をも得た位~~主~~を其の~~心~~
 並の~~心~~の山の精麻心丘~~状~~を~~心~~て
 不~~心~~、~~心~~考~~心~~中~~心~~に~~心~~訪~~心~~れ~~心~~に
 久保在世中~~心~~に~~心~~又~~心~~う~~心~~あ~~心~~内~~心~~て~~心~~え~~心~~れ
 が~~心~~の~~心~~を~~心~~建~~心~~す~~心~~く~~心~~前~~心~~に~~心~~あ~~心~~う~~心~~て~~心~~一~~心~~向
 言~~心~~通~~心~~う~~心~~知~~心~~ん~~心~~え~~心~~う~~心~~に~~心~~を~~心~~か~~心~~入~~心~~つ~~心~~て~~心~~え~~心~~る~~心~~と~~心~~は
 久保と久保とを建~~心~~す~~心~~る~~心~~通~~心~~に~~心~~中~~心~~に~~心~~て~~心~~

るものありて金の色の葉を大きく縫めて能
 葉束の製むる幕をこつてその下に置かると
 此より久保式ひる二階をせむらうちう茶
 室のあき世にうらしく整つたにあらむらう。成
 胸に比のうけおろしおろし考流し置置
 を置まへん左園のこととくに階を板を入るを
 板
 くりはきこむを氣のつ利き目
 便利ひる材料とすて土地の
 土を用以てする竹をまくひをみるに
 出地のきむある所は切つて置板ひおろし
 此に柵をこつて三枚戸をひいてる大き
 るものを入ることを論便利ひある、流す

二個所ありて一は洞あることと一は藪穴の中
 く、こゝに板を置板に出来ており一は大湯浴
 一は板を置くに出来てある、すくは地
 りしきをみる、いろくの斑のあき花を湯掛
 置つてもあきつる色もある、此の五毛の斑を
 置つて置あきおろし色とあきつる色
 るこく千を置るゝ衣板をぬぐ、こゝも出来し
 をより更なる浴を置くに節を(土間)造るは行
 くと山の林間の地元の一あきつるに極めて
 廣ういせむらある、こゝを置お部のみを設
 けたとそのあきつるを思付ぬひある、こゝも置
 切つて置あきつる出来てなる天井と細井を

人の心は神身の親ら年貢を拂ふが
 ちの心はむらさき、ゆめを乞は様持をせん
 の心は、せん以てまゆめを一つも樂しさを
 成しはことごとく、自由を奪ひんは生と
 送つてめは、せんぢんゆめを犠牲の地
 又満足してめは、おれを単油を日ごとく
 續いた、油身の事と悲し、も油を常
 心は、穩まらずせん来は
 吉き出しがめらうも自氣う利らおせし
 い
 ありはとらうく文章の流をすうらう
 の文章をうけし古き流と一笑流を修りし出

つ、先は心通う終るる出来は黙
 疎信、一里村う古はる文の内は黙
 疎目の静しとらうく、おれと
 の静しをつけてる、或は鏡と
 云ひ或は其おとまの、おれとエジツケ女
 舟鏡をとおらうく、おれと下し其お
 せんうらう、おれと、おれと、おれと、
 る、おれと、おれと、おれと、おれと、
 式はと一、おれと
 海をせきしオロの、おれと、おれと、
 杉を山に、おれと、おれと、おれと、
 自分七割の、おれと、おれと、おれと、

三ふ流しう初まりて、自分とまゐる就成
しと事と我元福以の男女心中の心配左
様を復旋のしあを無い、云々洋人いくら
方性のゆえに洋くとも、云々恐くも此を
とまをほいしおあるもの、こん：指を深
めせんバ、セキレラロジ―セキレラと云
いんまのとや道通に語る
あ道通のセキレラロジ―の流しの中、西洋
「基督の像：悪者」をみる、このうを
と白命、マリヤの像と悪者を志しんを
こののうあると云ふこと、何んか、此に
ると日本でも、観音像と悪者、このの

のうを一般に性悪の流し、人間的、出
拜のうは、志をきとけし、道徳あるもの
ひある、マリヤの像と美人の像と、
畫家う、志を、敬く、其、昔の像
と、山、味と、つ、美、男子、描、の
七、實、性、悪、的、機、械、之、ん、皆、性、悪
を、満、ち、し、ん、外、う、と、あ、
と、ま、あ、甲、の、女、と、ま、悪、の、世、の、中、に、あ、
こと、う、更、之、の、野、を、う、
〇一月十一日、ゆ、東、の、お、日、平、山、を、に、別、る、吉、書
を、過、る、あ、山、を、け、う、あ、の、床、に、う、の、機、械、の、
の、那、馬、像、を、描、き、う、双、輪、を、給、う、あ、え

上出来たり三つ五つ内とそその解りしは
さう下條桂女の高士陸驢の掛物
氣の入り外にふゆの石棟のしほと書し
ゆと題したる絹本喜入秋葉書し
とて鴨戸の書しとてこゝへ書し一程
の巾敷あり桂女とせし掛物とてこゝへ
ゆきぬ京都のちし年成刻成石本
晴海とて一ちしあふ桂女自らかき
も山色と題しとてしし細く書し
少包判書と申してえんかたに似て
題しとて一尺ほどのしほとてあまの
式のゆへとて鏡にあはるる所の

面鏡に一程のしほをわくはるる
ゆきぬの世話をせしはゆきぬ
○蘇杭菓のゆきぬは四民の好むる
法津を伝ふるも律大さうとそよか
此後ゆきぬの心をゆきぬおきぬ
味のあはし
○日本の風俗がやうのふく
しとて中々表の敷くは足部のあ
はるる表の仕立はちうのゆきぬ
せしとてゆきぬとてゆきぬ日本
ぬ人の蓮あを掲げたりとてゆきぬ
紺結編るの紫出しの敷くり白帷の女

美的趣味

くつゝの地盤界の趣味として其の
價値を以て西軍人の心を以て性根強固の志
の物語を無闇に或るつて物人分任を以て
こゝろを以て是れを以ていふことを成すの
今も其の内に因らば結果はさきかたは
地盤を以てその必要とするに地盤を以て
を免れぬ

○熱海に遊ばせしと云ふ出来しは此結果
現代小説に親しむ形は増す一丁起つて
是れを以てつゞや美事なり浪士の心術の一
作を讀むに抑留するやいと云ふれこと
氣のつゞつて是れを以て讀むに氣を以て

こゝろに、美事のそのことを此の如く
何れを以てつゞや美事なり浪士の心術の一
作を讀むに抑留するやいと云ふれこと
氣のつゞつて是れを以て讀むに氣を以て
年輩七回しつゞや美事なり浪士の心術の一
作を讀むに抑留するやいと云ふれこと
氣のつゞつて是れを以て讀むに氣を以て
七人：腹を以て其の所、其の所、其の所、
の點綴して一程の興味ある所、其の所、
く読しう人を引ける力の得る所、其の所、

志：ブツキらぶらうど何うも奥、唐、人、情
あり涙ある所、一世を睥睨しん比と思ひ
まい園々しい所、あつるリセ入根か正直
である所、お入居托せぬ所、お世解氣
の無い所、すんて御向一也、そつとく、こ
ふこそ、あて、我ん、御向さん、と、一、作、さ
ん、さ、と、さ、ふ、と、こ、と、う、あ、つ、た、え、ん、ご、二、年、前、前
の、こ、と、も、あ、る、あ、ゆ、と、一、笑、附、し、某、の、さ、を
浪、六、の、描、し、さ、う、ま、人、物、比、と、思、つ、た、の、あ、じ
本、を、つ、ら、ぬ、ゆ、う、ら、れ、も、無、つ、た、が、某、お、と、遠、さ
う、ま、つ、た、と、切、め、せ、も、の、感、え、と、此、以、結、納、劇
と、ま、う、と、出、比、前、後、二、つ、合、ん、事、と、更、ま、る、地、の

一作の加つたところ、本を渡して見ると、其の
と、某、お、の、言、つ、た、も、う、と、大、体、の、筋、を、是、前
男、の、一、作、が、論、者、し、も、一、片、狀、の、氣、分、を
を、存、し、某、お、の、既、え、の、其、言、を、氣、を、買、ひ、
九、共、し、劇、作、の、何、う、れ、氣、分、者、の、氣、分、を
と、遊、遊、し、お、ひ、さ、る、ん、思、ひ、ん、其、の、言、を、
う、ら、る、美、の、方、子、の、困、ひ、を、さ、う、と、さ、る、の
を、氣、分、者、の、方、子、を、お、ひ、さ、る、ん、思、ひ、ん、其、の、言、を、
の、を、買、ひ、ぬ、ら、し、お、ち、こ、と、又、終、る、一、心、も、我、を、お
つ、て、妻、と、す、る、と、さ、う、い、つ、た、前、述、の、助、む、別、の、筋
と、味、の、あ、ら、む、も、さ、う、い、つ、た、一、作、の、性、格、を、さ、う、と
描、さ、ん、と、す、る、其、の、教、養、の、受、真、面、目、じ

又人曰くどうせ中の道に誠を以て打ちて
しんぞとのあり給らんうらうらうしんぞの
と傳ふるといふ余を敬み出でて七言し
の併し夫人も給らん其子の命を絶て
みかこは道徳ある者の教誨を誠み
やめ何とせよ天

傳へ首を切る所を以てせん一木文おを授て
其方の清説者かへることしんぞの
うらうらうしんぞの首を切る清説を以て
較せんバ日エツタリとて其書を悉し上出
再うしし中野武蔵う高家方而より
清説を以てせん一木文教育上

リ後研清説に及ん無思慮と改訂し
其方とを以てし余も会長雅考を以て
て其方の換持しとて早稲の日
もすもあつて親戚と抱ちて後換
こその我と抱ちて其書を以て
こことと三よ、ふとのめこ余の一身と一持
政治的とす

○余の對自身を慰養する互人來功
とす余語つて曰く

余の後持合々長とて僕使あると
ハ多あ余の道徳に任賢あるは
悲觀的とすその故ある後換合々

今や四海の事、一に取評を懐し、伯の
既、仰、目、を、お、仰、す、る、こ、の、り、つ、て、其、の
今、下、に、集、ま、る、ん、と、す、而、も、此、の、功、も、か
う、事、を、集、ま、る、に、逃、る、の、方、甚、お、あ、ら、う、後
援、合、し、と、皆、論、兵、を、と、ま、る、の、早、大、出、身
者、と、包、ら、す、而、し、其、の、結、束、を、一、固
う、思、入、の、後、援、と、し、ん、と、す、る、と、ま、る、
室、前、の、新、あ、ち、也、之、れ、を、お、ま、あ、ら、ハ、元
行、援、の、め、し、其、の、新、あ、ち、を、し、ん、と、す、る、
其、の、援、が、の、智、力、の、強、弱、を、し、ん、と、す、る、
と、又、其、の、今、の、心、神、軍、事、的、行、動、
を、し、ん、と、す、る、大、勢、力、を、し、ん、と、す、る、

上、に、於、て、皆、を、後、援、と、し、ん、と、す、る、似、た、う、而
し、も、其、の、新、あ、ち、を、し、ん、と、す、る、故、を、以、て、元、行、援、と
し、ん、と、す、る、元、分、働、く、ま、を、お、ま、あ、ら、ハ、元、
後、援、と、し、ん、と、す、る、其、の、う、ハ、ハ、の、お、ま、あ、ら、ハ、元、
こ、の、事、を、し、ん、と、す、る、能、ら、ず、と、す、る、也、と
友、人、中、内、の、お、ま、あ、ら、ハ、元、分、働、く、ま、を、し、ん、と、す、る、
の、元、分、働、く、ま、を、し、ん、と、す、る、也、と、す、る、
後、援、と、し、ん、と、す、る、其、の、元、分、働、く、ま、を、し、ん、と、す、る、
か、あ、の、元、分、働、く、ま、を、し、ん、と、す、る、也、と、す、る、
能、ら、ず、と、す、る、也、と、す、る、
○改、流、の、事、と、半、信、の、事、と、及、ば、ず、お、ま、あ、ら、ハ、元、

自分と毀譽褒贬と一身に引受けしをば
は後世に長とせらるればのむあるが、後世に
う全世に於て利するは海潮のよみのありは教
り始終に於て損とせらるるをこそ其の損を
中傷するは尤も甚しき事なり。其の中傷を
せらるるをこそ、其に於て其のありは一二言の并
無の事なり。報の記名を掲げて自人の
汚名を著し置かしめざるを報知の事なり。其の
ありは、他はし報知の初めは世の利のやまし
邦外三四の地なり。揚敷やしめれば自分
の全世に報知の載つてくる。左のありは
あるもの。報知の扱正揚りある。其の早

論を載つてもあしく自分の所懐を載せ
る筈であるが、其の要略を左の如くし

早稲田大学
このとき、政治運動と始めるべきであるの
が、大隈仰る内閣首脳たるべきも、地
政治運動を起すべきである。勿論、政治を
せらるる異するはありけり。其の
何れも、其の早稲田大学の前身である
その子孫を天下に有名にして政治の
扱があることを思ふ。其の、全体定
法公布して國民皆主憲政治の智徳

早大と後援會

市島謙吉氏談

▲大隈伯後援會が早大出身者の多數に依りて發起され又は賛成されたるは事實なるも世間往々早稲田大學と後援會とが同心異体の如き疑惑を懐き居るは頗る辨別を誤りたる見解と言ふべく同大學は何處迄も超然主義にして其の標榜せる學問の獨立は永久に不易なりされば高田學長、天野坪内、浮田の諸博士を始め幹部たる諸教授も冷眼昨今の政争を眺め一萬の學徒を率ゐて講學に餘念なき有様なり

▲之と同時に早稲田大學は大隈總長の總理大臣たるを妨げ又は校友の政治的運動に容喙するの權能なきは勿論なり校友は言ふまでもなく已に一本立の人々にして其の行動は自由なり政治上に於ても其の意見に依りて右に左にするは個々の得手勝手なり現任教員小山温氏並に前總長鳩山和夫氏の令息一郎氏が校友會に屬するが如き副島義一氏が隈伯と反對の地位に立たんとする如き藤原文太郎青地雄太郎氏等が國民黨に籍を有するが如き砂川雄毅、早速整爾、町田忠治、渡邊亨其他の諸氏が非校友若くは隈伯後援會に屬するが如き皆其の主義主張に依りて自由の行動を執

▲而かも後援會は校友會の團體にあらず校友中の有志にして大隈伯に意を有するの美を濟さしめ大正維新の實を擧げしめんと熱望しつゝある者が世間同感の士と提携して組織したるものなれば早稲田學園其のものと何等の關係なく又早稲田學園が濫りに干渉し掣肘すべき性質のものにあらざるは勿論なり又校友の一部が發起者たるには相違なきも其の期する處は滿天下に於ける校友以外の愛國の士殊に既成政黨以外の人々にして志 國家にある者が多數之に加はり其の中心たらん事を希ひつゝあるものにて校友の一部が發起者となれるは随より始めたる意に外ならず余の會長たるを諾せるも亦此の故なり

ゆるあに
外あらす
た

▲余は早稲田大學創立以來の關係者なりと雖も曾て教職に携はりたる事なく經營に微力を致したるのみにして今回會長となれるに至れるは多士濟々の早大に何等の損失なく且つ多年の知遇を受けし隈伯が老軀を提げて國家と憲政との爲めに致さるゝ大努力に加勢するを以て本懐と信じたればなり而も余の舉動の爲めに累を早稲田大學に及ぼさん事を畏れて斷然理事の職を辭せり

▲世間動もすれば隈伯後援會を目して人に黨すと云ふ是れ天下の愚論なり余等は主義を實行せんが爲めに人に黨するなり何となれば主義政綱は其の人を得て始めて行はるゝに非ずや憲政の樹立黨弊の打破大正維新の確立は隈伯の如き元氣名望兼ね備はる偉人を得て始めて行はるゝものなり此の老偉人をして其平生の志を行はしめんが爲めに之を後援す何の不可か之れあらん余等後援會の行動は合理的にして然かも最も立憲的なりと信じて疑はず

教育にあり、國民の政治を以て趣味とす
よ、進んで國民各個の人格を高きとす
英王に徴するも、切つては

早稲田大学の所歴に於て、石塚上達り、
この人、今も此にあり、即ち種々の私
を、概らして、法律を標榜して、主つて、
中、早稲田の法律、を以て、憲法政治、
重きを置き、法律をも併せ、自由教
育を施したる、而して、他の、種々、
を、以て、文料と、之を、後付け、
密接の關係を、有する、よ、其の、科目、
の、

史、その、推考、や、倫理、や、社会、を、
皆、政治、の、大關係、を、有する、よ、其の、
に、或る、政治、の、智能、を、有する、
則ち、其の、大關係、の、こと、も、大政治家、
の、職務、に、あり、と、是れ、よ、其の、
を、以て、其の、こと、の、あり、を、
は、漸く、その、あり、を、
認む、よ、其の、あり、を、
考へ、其の、あり、を、
あり、と、其の、あり、を、
よ、其の、あり、を、
よ、其の、あり、を、

しとある又全回敷るの新多純とを交
と早稲由出身あり入りてその如く
い位ひある随つて堂流もいろく
らより我を清くせ其の自由を思も
けんとしてことと無いへんて校つと
ぬ不得世もその一本主の政治家
その折動を令く自由ひある

④個校も澤ひあるさう大隈伯の
の創立者として希望せしむ所
にも適する政治家の能力を有する
出さんとすまはるる伯を
が及ぶしやうか、まゐることを伯の

する所ひまひ、を給る校の
んとのあるべきは其と無い、まゐるを
政治家の伯の命を遂ぐる校を
校を授解し、そのまゐる
とあるさうあめ之政治家の智識も
解ひあつた、是れ死か
しとせ、其の後校合の起つて
いようて政治家の教育を
伯の政治的行動を主として
其の主義政治家に
せんとして、時々
其の校と合離し

学校と此團體を一心一体を以て言ひ
まをす此の操に甲斐を及ぼさんとす
るに何れを以てせしむるに政府も
学校も若し免れぬ其毒にまみれ
置つれば政治家も進んて中傷を
試みるにその何れも主を沈下し
於て早稲田の如きと政治家を
施しに其出身ありて政界に活動
の如きありては選挙界に活動
進歩の一現象として表はるけん
ぬるにありては、その烟を思ふ
や角を以てせしむるに其人の
言ふや

時勢後れを以て其の頭腦を
往年其人自身に以て後れを以て
施す事ありては政治家
と自分も漸く同。いの中
ことを自由するにその
いひあり
その操の如きは、自由の行動を
差支ふるに、其の國を以て
其れも無いに、其の内裏の
福の大きの流長にありては、
と流長にありては、其の操を
うるに、其の誤解を以て

の同志を包摂して是れをツロ甲の同志中心
ニ置し属する伯の勢力成るも皆後援者
の同志固の範の人ひあるべし。在りしとき次
をひあるべし。今も亦置するのむも、総長は伯
に置するのむも無いことそのはちあるべし
し伯と云ふ政治家に置するのむあること
を勿論ひある。何んと言んか、如何と主義我
策の可きことあるべし。その人ひを僕
の同志を置くべし。その人ひを置くべし
を置くべし。其の地と云ふ。格人、人、置する
ことをしむを得るべし。ひと、後援者、その
り、互い、伯、政治家、皆、互、同、し、こと、ある

之れを置するべし。主義、政治、見、る、伯、を、置、する、為
ひあるべし。私、置、する、べし。勿、論、ひ、ある、世
或は、格、百、の、お、お、お、政治、見、る、伯、を、置、する、左、祖、七
す、伯、に、就、く、を、見、る、格、を、置、する、と、解、する、也
の、七、の、人、ん、さん、も、大、多、く、河、也、多、く、伯、を、置、する、
ま、つ、と、格、も、格、を、置、する、人、ん、さん、も、格、を、置、する、
り、り、り、政治、見、る、伯、を、置、する、と、格、を、置、する、
と、行、は、一、本、一、筋、立、意、的、の、置、する、と、格、を、置、する、
の、置、する、と、格、を、置、する、左、祖、七、を、置、する、と、格、を、置、する、
も、得、る、と、格、を、置、する、と、格、を、置、する、と、格、を、置、する、
こと、云、ふ、は、ち、ある

